

第一回の訪問のとき、スリランカの少女たちと三ヶ月で三百本のストラップを作ることを約束し、出来上がったらまた行くと約束しました。

約束の三ヶ月が過ぎ、現地のサシさんから少女たちが三百本のストラップを作り、また、そのうち出来の悪いものは作り直したとのメールが来て、二度目の訪問のスケジュールを調整することになりました。二度目は初回の経験を生かして、ちゃんとした目標を持って出かけたいと考えました。

- ① 約束の三百本の作品について、きちんと評価をし、品質向上の意識を高める。
- ② 組紐に使う糸はシェルターの作業所内で出る、織物の屑糸を利用する。
- ③ そのための糸さばきの方法を教える。
- ④ 入所している少女だけでなく、現地で指導できるスタッフに技術を伝える。
- ⑤ 初版のテキストに掲載したパターンのうち残り5パターンをマスターしてもらう。
- ⑥ 商品化し、販売ルートにのせるための市場調査を行い、類似品やみやげ物の価格を調べる。
- ⑦ 上記目標を達成するため、ワークショップを午前、午後で行い、ワークショップに5日をあてる。

このような計画を立てて、日程を調整し、八月五日出発、八月十四日帰国と決めました。出発前に現地から、ストラップ用のフックが欲しいと要請があり、手持ちの中から半製品約二千本を持って行くことにしました。

このほかに、私の友人が試作してくれた組紐の応用作品をいくつか参考に持っていくことにしました。

午前8時半にアラガマのシェルターに到着。前回いた寮母のフランスさんが退職していたのは残念で、通訳をしてくれる方がいるのかも新たな心配となりました。

到着後すぐに少女たちの作品を見せてもらう。いくつか指摘する部分があるものの、習作としてはまずまずのできばえです。

午後から、早速ワークショップを始めたが、日本を出発する前のメールで、くず糸6色を準備してもらうように連絡しておいたのですが見当たりません。くず糸を使った足ふきマットを作るようになったので、今は残っていないというのです。

人数も始めの打ち合わせと違っており、日本との違いをつくづく思い知ることになりました。

今回から、先生たち3人が加わってくれたので、基礎からおぼえてもらい、指導役になってもらうことにします。ただ、前回参加した少女たちのほうがずっと進んでいるので、バランスを取りながら進めていかなければなりません。

嬉しい誤算は予定人員より多い少女たちが興味を持って、つぎつぎと人数が増えたことです。それに伴って、道具のディスクを作る材料が足りない羽目になりました。二日目、三日目と日を追って参加する少女たちの人数が増えていき、教える内容より道具と材料の段取りに追われるようになってきました。最初から参加している少女たちの進歩は早く、次々に新しいパターンを覚えたいとせがんできます。彼女たちの熱意が伝わって嬉しい悲鳴ではありました。

五日間のワークショップを通して、延べ五十人ほどの少女がワークショップに参加し、三人の先生たちと、少女たちの中からこの施設にとどまるであろうと思われるラリカという名前の少女にほかの少女たちにはまだ教えていない技術と、器具の取扱について特別メニューで伝えてフックその他の材料の管理を任せることにしました。

次回、半年後にまた訪問する約束をして、今回のワークショップを終了しました。この結果、ラリカと初回から参加している4名は基本パターン十種類をマスターし、今回初めて参加した少女たちは基本の2から3パターンを習得したことになります。

今後、商品化するにあたって取り組まなければいけないことは品質管理です。

私たち日本人は総じて「良いもの」を求め、「まあまあ」を良しとしないのですが、「良いものとは何か」を教えることはとても難しいことです。

また新たな課題を持って帰国しました。

2015年9月